

岩泉町「だれでもフォトグラファ」活動

- 復興プロセスを自分たちの手で記録し、復興を後押ししよう！
- ふるさと岩泉の美しい姿を再発見し、コミュニティの絆を強化しよう！
- 〈岩泉のいま〉を世界に発信しよう！

岩泉町だれでもフォトグラファチーム

岩手県下閉伊郡岩泉町小本地区他

写真：「それでも歩き出す」（山口あまね）

(1) 活動地域の概況、特徴、まちづくりの課題など

岩手県下閉伊郡岩泉町は、北上山地の東部に位置する本州一の広大な面積を持つ町である。町の西端は盛岡市に隣接し、東端の小本地区周辺は太平洋に面している。「森と水のシンフォニー」がキャッチフレーズであることからわかるように、美しい山林、急峻な山に囲まれ、耕地は少なく、林野率が高い。小本川、安家川、摂待川の三本の川に沿って集落が形成されている。日本三大鍾乳洞のひとつである龍泉洞も、岩泉町の観光資源として重要な役割を果たしている。農業、漁業、酪農、製造業、工業、観光業と、第一次産業から先端産業までバランスよくそろっているのもこの町の特徴のひとつである。

◆岩泉町の主なデータ

位置：東西 東経 141° 19' 03"~141° 57' 06"

南北 北緯 39° 40'~40° 24'

面積：992.36 km²（東西 51 km、南北 41 km）

人口：9,697 人（2017 年 7 月住民基本台帳）

主要河川：二級河川 小本川 48.7 km（支流多数）

二級河川 安家川 27.9 km

◆2011 年 東日本大震災による被害

人的被害：死者 13 人

住宅被害：全壊 177 棟（うち流失 80 棟） 大規模半壊等 31 棟

◆2016 年 台風 10 号による被害

人的被害：死者 20 人 行方不明者 1 人

住宅被害：全壊 444 棟 大規模半壊等 523 棟

土砂災害は土石流 116 箇所、がけ崩れ 4 箇所であり、被害の 8 割が岩泉町に集中している。



灯台から太平洋を望む



防潮堤を超える津波



津波被害のあと

東日本大震災後、被災住民は町内 3 か所に建設された仮設住宅暮らしを強いられたが、東日本大震災の被災から 5 年が経過し、災害公営住宅の建設や、自力建設等が進み、復興がようやく見えてきた 2016 年 8 月、台風 10 号により、岩泉町全域にわたって、山津波、河川氾濫による大打撃を受けた。広い町内に散在する小規模な被災地をどのように復興していくのか、度重なる災害による住まいの移転などにより、再三打撃を受けたコミュニティをどのように復興するのか、①被災からの復興 ②コミュニティの再建は、岩泉町のまちづくりにおける大きな課題である。

(2) まちづくり活動の背景、契機、経緯など

① 活動の背景と活動発足の契機、活動の概要

◆岩泉町は、2011年3月11日の津波によって、小本地区に大被害を受けた。町内三か所に仮設住宅が建設されたが、そのうち最大規模のものは小本の仮設住宅であり、90戸、約150人の人々がここで暮らした。

◆仮設住宅暮らしには、ボランティアたちのさまざまな支援活動があったが、ボランティアの支援をありがたく受けながらも、「こういうことに『慣れて』しまっては、いけない、支援を受け取るだけでなく、自分たちでも積極的に関わられる活動をしていきたい」という声があがるようになり支援チームから活動が提案された。これが「だれでもフォトグラフィ」の発足契機である。

◆「だれでもフォトグラフィ」活動の概要は以下のものである。

活動の目的：

- ・復興のプロセスを身近な生活の中で記録し、復興の後押しをする。
- ・写真を撮影するなかで、ふるさと岩泉の魅力や誇りを再発見し、コミュニティの絆を深める。

活動のサイクル

- ・プロのカメラマンの指導を受けて技術を磨くとともに、年に3回程度、合評会を開いて、撮影した写真を見ながら、互いに切磋琢磨する。
- ・3月11日のメモリアルデーには、毎年、写真展を開催している。

② 活動のその後

◆生活再建、復興に向けての忙しい生活の中で、買い物かごの中、軽トラックの助手席など、いつもカメラを持ち歩くことによって、見なれたふるさととの風景もまた魅力的に見えてきて、自分たちの誇りにつながった。

◆写真という手段で、思いを表現することによって、生活が楽しく、充実することも実感した。

◆7歳から80歳までが参加し、まちづくりへの意識も徐々に深まった。

2011年	11月	「だれでもフォトグラフィ」発足
2012年	3月	実行委員会形式によるメモリアルイベント
	3月～	第1回写真展「春遠からじ」開催（三陸鉄道小本駅構内）
	5月	仮設住宅入居開始 撮影会開催。テーマ「小本駅周辺」
2013年	3月～	第2回写真展「春遠からじ」（三陸鉄道小本駅構内）
	5月	災害公営住宅一部入居開始 ヴァージニア工科大学にて写真展「春遠からじ」開催
	9月～10月	東京都中央区女性センターにて写真展「春遠からじ」開催
	12月	第2回撮影会開催。テーマ「お世話になった仮設」
2014年	3月	実行委員会形式によるメモリアルイベント
	3月～	第3回写真展「春遠からじ」開催（三陸鉄道小本駅構内）
	3月～4月	東京都中央区女性センターにて写真展「春遠からじ」開催
2015年	3月	実行委員会形式によるメモリアルイベント
	3月～	第4回写真展「春遠からじ」（岩泉町小本津波防災避難施設内）
	6月	第3回撮影会開催。テーマ「復興を撮る」
	9月	URフォトコンテスト応募
	10月	ヴァージニア工科大学にて写真展「春遠からじその2」開催
2016年	1月	「初日の出」撮影会（熊の鼻展望台より）
	3月	実行委員会形式によるメモリアルイベント
	3月～	第5回写真展「春遠からじ」（岩泉町小本津波防災避難施設内）
	8月	台風10号による被災
	9月	URフォトコンテスト応募
2017年	1月	「初日の出」撮影会（茂師漁港より）
	2月	新年会を兼ねた第14回合評会と今年度計画検討会
	3月	実行委員会形式によるメモリアルイベント
	3月～	第6回写真展「春遠からじ」開催（三陸鉄道小本駅構内）

合評会は、2011年12月から2017年2月までに14回開催されている

(3) まちづくり活動の理念、目標、コンセプトなど

① 理念

- ◆「町民だれでも！」…年齢、性別の如何を問わず、だれでも参加して、写真として復興プロセス、町のいまの姿を記録しよう！
- ◆「コミュニティの再建！」…ふるさとの誇りを取り戻して、被災によって寸断されたコミュニティの再建につなげよう！
- ◆「国内外への岩泉の『今』を発信！」…ふるさと岩泉の美しい姿を再発見して世界に向けて発信しよう！

② 目標と私たちのスローガン

- ◆「だれでもフォトグラファ」なのだ！（みんなで復興過程を記録しよう、全員参加で行こう！）
- ◆復興を見守り、復興の後押しをしよう！ ◆被災地支援活動、防災・復興推進活動につなげよう！

③ コンセプト：復興とコミュニティの再建は、町民みんなで！一まさに、「だれでも」フォトグラファ



「だれでもフォトグラファ」
フォトグラファ例会とフィルム回収、
新しいカメラ配布のお知らせ
IIPA JAPAN 国際女性建築家会議日本支部 復興岩泉の本部

こんにちは！
寒くなってきましたが、みなさま、
お元気でお過ごしのこと存じます。
次回の例会のお知らせです。
どなたでも参加できます。はじめての
方もぜひお越し下さい。
お待ちしております！

★フォトグラファ例会
日時：11月29日（土）19:00～21:00
場所：小本仮設住宅団地集会所

プログラム：
1. 撮影指導したカメラやフィルムの回収
2. 「だれでもフォトグラファ」の活動について
3. 今後の活動について
4. 次回予定など

（参加費は無料です！）
（お土産や飲み物などありません！）
（お土産や飲み物などありません！）

(4) まちづくり活動の内容、特色、今後の展開など

内容：「だれでもフォトグラファ」の活動は、東日本大震災による大津波で被災し、仮設住宅で暮らす人々を中心に、2011年11月から始まった。プロカメラマン・橋本照嵩氏の指導を受けながら、町の被災からの復興過程を自分たちの手で記録していこうとする活動で、現在も継続中である。住民自らが、撮影を通じて「それぞれの現在」を表現することで、被災から復興に至る長く苦しい期間を強く受け止め、充実して過ごし、復興への力を養うことも目的となっている。[技術指導→撮影→合評会→撮影]の流れを繰り返しながら、毎年3月11日の被災メモリアルイベントに合わせて、写真展を開催している。運営に関して、国際女性建築家会議日本支部の支援を受けているが、復興の進捗とともに自力で推進する部分が増え、撮影会や写真展なども、自主グループとして実施することができるようになった。

特色：

- ① 継続的に撮影を続けることによって、復興と連携し、復興を推進、後押ししている。
- ② 7歳から80歳まで、年齢層や性別を問わない住民が参加している。
- ③ ふるさとの誇りを取り戻すことにつながっている。
- ④ ヴァージニア工科大学、国際女性建築家会議（本部：フランス）などと連携し、国際的に東日本大震災からの被災地の復興の進捗を伝え、世界からの支援に感謝を伝えている。
- ⑤ 買い物かごや軽トラックの助手席にカメラを持ち歩いて撮影を続け、日常の暮らしが撮影・記録されている。仮設住宅の内部など、行政では、収集できない、貴重な復興の資料が収集されている。
- ⑥ 被災以後の苦しい時期の町民の生活に、楽しさや充実感をもたらし、住民の結束を強化することにつながっている。

今後の展開：岩泉町の復興は、スピード感を持って進み、2016年9月には、復興のめどが立ったことの祝賀が開催される予定だった。しかし、2016年8月末の台風10号は、岩泉町から上陸するという前代未聞の経路をたどり、町全域に大被害をもたらした。

岩泉町は、「岩泉30景」と名付けた美しい景観を持つ場所があり、これらも、かなりの被害を受けた。しかし、こうした状況を記録することも大切であるという認識に立って、このような状況にも目を向け、撮影を通じて町内でも支援して行こうとするのが当面の展開計画である。



撮影指導の一場面



小本漁港での撮影会



橋本カメラマンの講演

(5) まちづくり活動の主体、組織、連携体制など

◆活動主体：小本地区を中心とした住民が活動主体である。すでに述べてきたように、「だれでもフォトグラフィア」の活動は、東日本大震災を契機に、小本仮設の住民を中心に始まった。復興の進捗につれて、仮設から災害公営や自力建設の住宅へ、などと、住まいの移転に伴ってメンバーも変化したが、活動を知った住民があらたに参加してきているケースもあり、活動主体は、小本地区から岩泉地区など周辺住民にも広がり、幅広い活動となっている。

◆支援団体：国際女性建築家会議日本支部（UIFA JAPON）（運営支援）

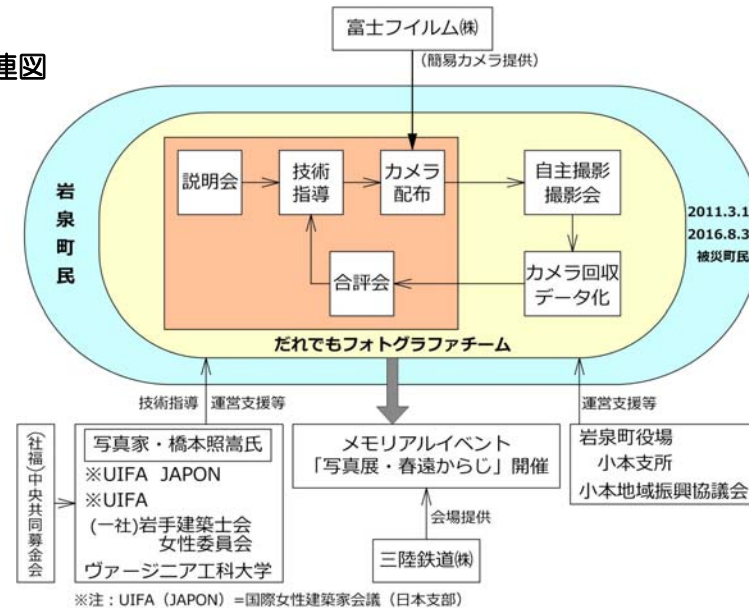
◆技術指導：写真家 橋本照嵩氏（埼玉県在住）

◆物的支援：富士フィルム株式会社（カメラ提供）、三陸鉄道株式会社（会場提供）

◆助成：（社福）中央共同募金会

◆協力：岩泉町役場小本支所、小本地域振興協議会、岩手建築士会女性委員会

◆関連図



(6) まちづくり活動の費用、財源、収益など

会費： 少額ながら、会合開催時に集金している

寄付：・富士フィルム株式会社（簡易カメラ提供）

・国際女性建築家会議日本支部（写真展開催時のパネル作成、パネル台紙など）

助成金・社会福祉法人中央共同募金会

収益 なし

(7) まちづくり活動の成果、地域への貢献など

◆成果と地域への貢献

①『明日の岩泉へー岩泉町復興の記録 その1 (2013年3月刊行)、その2 (2014年3月刊行) その3 (2015年3月刊行)』へ、写真とコメント提供

岩泉町発行の3年間にわたるこの3冊の記録は、被災から、仮設住宅暮らし、新しい住宅への移転、インフラや公共施設、産業の復興など、復興過程の詳細な記録や住民（成人、中学生、若い担い手など）の座談会を入れた貴重な復興記録である。この3冊には、「だれでもフォトグラファ」たちの撮影、記録した貴重な写真が多数掲載され、また、座談会にも出席し、岩泉の生き生きした姿を伝えている。



「フォトグラファ」の写真がたくさん納められた復興記録
その1、その2、その3

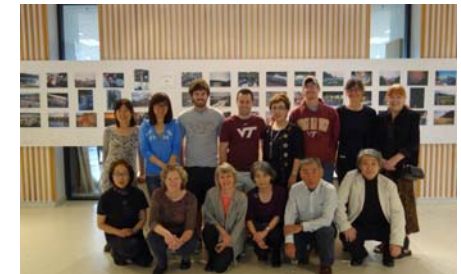
② 写真展開催により、被災状況から復興に至る岩泉町の「今」を国内外に伝えた

写真展により、岩泉町の復興の進捗や、折々の状況は国内外に広く伝わったと同時に、世界から日本への支援にお礼をいうことができた。

・ヴァージニア工科大学で開催された写真展では、この大学の立地するブラックスバーグという町の町長ロン・ロルダム氏が「…写真展開催は、私たちをあなた方の生活の一部に招き入れてくれることであり、はるか6000マイルかなたのまちからあなた方と思いを共有し、あなた方の生活再建、あなた方のまちの復興を祈ります」と挨拶した。

・ヴァージニア工科大学学長（当時）のチャールス・スティーガー氏は、「津波直後からのリアルタイムな経過、復興の過程は、災害の貴重な記録となるとともに、長く輝かしい未来を目指し懸命に取り組む岩泉町の人々の不屈の精神を表したものだといえ、現在、コミュニティの回復力という概念が注目されているが、生き生きと描写されたこれらの写真は、比類のない、貴重な教訓である…」とオープニングのあいさつで述べた。

・フランスから被災地視察に訪れた国際女性建築家会議（UIFA）の会長ソランジュ・デルベッツ・ド・ラ・トゥール女史は、「立ち足はだかる困難を乗り越えようとする勇気と現実を受け止める力を目にして、以前と変わらぬ生を取り戻そうとする姿勢や決意を称賛せずにはいられなかった。その粘り強さと実行力は私たちすべての人間に共通するものとして記憶されなければならない…」と述べた。



ヴァージニア工科大学での写真展

③「写真撮影」という表現手段によって、被災住民に表現することの楽しさを伝え、苦しい時期の生活を支える一助となるとともに、コミュニティの再建につながった

日常生活の中にいつもカメラを持つことによって、ふるさとの美しさや誇り、人間関係の豊かさなどを再発見し、住民同士の絆を深め、コミュニティ再建につながった。それは、台風10号の被災に対するフォトグラファたちの構え方にもあらわれている。

④ 復興過程のまたとない記録となり、被災が風化することを防ぐ役割を担った

写真展を開催するたびに、見に来た人々から「初めは暗い写真が多かったのに、毎年笑顔の写真が増えている」と評価された。それは、復興の進捗を示すものであり、復興過程の住民だからこそ残せるまたとない記録となった。写真展により大災害の状況を見る人に伝え被災が風化していくことを防いでいる。



フランスから被災地視察に来た
UIFA会長（写真展を見る）